様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０３７７

研究課題名（和文）ルソーの嘘の哲学－新たなる統一的綜合的解釈の試み

研究課題名（英文）Rousseau and the Question of "Lying": Rereading His Major Works

研究代表者
桑瀬　章二郎（KUWASE, Shojiro）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：１０３４０４６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は「嘘」という視点からジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）の主要著作を読み直す試みである。『告白』や『孤独な散歩者の夢想』といった自伝作品で彼が展開した「嘘」についての考察はあまりにも有名だが、「嘘」は『社会契約論』や『エミール』といった理論的政治的著作や『新エロイーズ』のような小説においても極めて重要な主題であるのではないか。このような視点から、ルソー作品を再読し、新たな思想家像を提示した。

研究成果の概要（英文）：This research is an attempt to reread Jean-Jacques Rousseau's (1712-1778) major works from the viewpoint of “lying.” It is well known that Rousseau considered “lies” or “deceit” in his autobiographical works such as The Confessions and The Reveries of the Solitary Walker. However, “lying” is also an important theme in his theoretical works such as The Social Contract and Emile as well as his novel, Julie or the New Heloise. Thus, this research presents the unity of Rousseau's works in terms of his philosophy of “lies.”

研究分野：18世紀フランス文学・思想

キーワード：ルソー　啓蒙思想　政治思想史　フランス文学　18世紀

１．研究開始当初の背景

近年、フランス啓蒙研究、とりわけルソー研究において文献学的な精緻化と各領域の専門化が急速に進んだ。そのため、多くの研究が極めて限定的な主題や作品群を対象とするようになっていた。そして、各研究者がひたすら自らの専門領域に関する論文の「量産」を目指すという状況がうまれていた。一方で、日本国内では、海外の最新研究のみならず、基本文献さえ参照されないような、日本国内の知的文脈でのみ通用しうる、ひたすら「わかりやすい」研究が発表され続けていた。このような背景のもと、国内外の第一線で活躍する研究者との様々な共同研究の経験を活かしつつ、また研究の精緻化と細分化を十分に意識しつつ、最新の研究成果を丹念に読み込みながら、ルソー作品・思想を総合的に解釈するという試みが急務であると確信するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、前述のような文献学的な精緻化と各領域の専門化の進行によって回避される傾向にあった、ルソー思想の統一的総合的解釈を試みることにあった。しかしルソー思想の統一的総合的解釈とはいっても、当然ながらひとつの分析軸となるような視点の導入が不可欠である。本研究では、「嘘」という視点を導入することとした。ルソーにとっての政治的、文学的、宗教的「真理」の再構築の試みはこれまでに積み重ねられてきたが、「真理」の複数の裏面ともいえる「嘘」という観点からルソー思想の全体像を描き出そうとする試みはなされていなかったからである。

ではなぜ「嘘」という視点なのか。それは何を意味し、何を目的とするのか。本研究では、次の七つの観点から「ルソーの嘘の哲学」について総合的に考察することとした。順を追って説明したい。

⑴「嘘の思想家」としてルソーの名を文字通り西洋思想史に刻むことになったのは、間違いなく『告白』『孤独な散歩者の夢想』という自伝的著作における「嘘」をめぐる考察である。本研究では、これら自伝的著作で扱われる個人的経験としての「嘘」と道徳的義務の関係の分析に取り組んだ。これは本研究を遂行するうえで二つの意味を持っていた。①「嘘」をめぐる最も名高い記述から出発することで、本研究全体の問題の所在を、できる限りわかりやすい形で、明らかにすること。②この記述のうちに読み取ることのできる、明示的、あるいは暗黙の対話者との関係を明らかにし、自伝的著作における「嘘」をめぐる考察が、ルソーの代表的著作のそれと密接に関連している点を示すこと。この⑴に関する研究成果は「研究期間」前に公表できたが、本研究を遂行する際、絶えず立ち戻るものとなった。

⑵次に、ルソーの政治思想における虚言の問題を明らかにすることを目的とした。『社会契約論』と『エミール』については別途論じることにし、まず初期の最も有名な論文である『学問芸術論』と『人間不平等起源論』に対象を限定して分析を進めることとした。その際、特に注意深く検討することにしたのが、次の二点である。①晩年の著作で特異な意味を持つようになる「知識人の虚言」の主題が、『学問芸術論』と『人間不平等起源論』でいかに扱われているか。②『人間不平等起源論』第二部で記述される、いわゆる「詐欺師の契約」の再検討。「詐欺師の契約」とは現在に至るまで多くの研究者間で激しい議論の対象となっている、政治体成立の起源としてルソーが極めて両義的な筆致で描き出すモーメントである。

⑶第三の課題として、『ボーモンへの手紙』、『山からの手紙』といった代表的論争書における虚言の問題を分析することをあげた。弁明を主たる目的としつつも、精緻な理論的考察が展開されるこうした著作において、「嘘」は文字通り中心的主題のひとつとなる。本研究では、ルソーの論理の検討を慎重に進めながらも、それにとどまらず、ルソーの論理に潜む危険性をも明らかにすることを目的とした。当時、ルソーの名声と立場を危うくした二つの事件に関連づけて論争的著作を論じることで、ルソー思想に対する批判的視点を導入することを試みた。その事件とは、①十八世紀思想界最大の醜聞のひとつともいわれる「ヒューム事件」と、②ヴォルテールの手になる誹謗文書「市民の意見」の出版を契機として起こった論争のことである。そこでルソーは虚言者として、つまり嘘の思想家として告発されたが、この「世論」にルソーがいかに対峙したかを考察しようと計画した。

⑷ここまでの分析をさらに発展させるかたちで、『社会契約論』を「嘘」という視点から再読するのが本研究の第四の目的であった。とりわけ『社会契約論』については、膨大な研究蓄積がある。この作品をルソーの思想体系の内部に位置づけようとする試み。あるいはそれとは対照的に、この作品を他の作品から切り離し、西洋政治思想史の中に位置づけようとする試み等々。こうした多種多様な解釈が存在するが、本研究では、とりわけ⑵で注目した契約の問題に注目し、『社会契約論』で提示される契約概念の独創性を浮き彫りにしようと試みた。その際、分析の鍵としたのが、立法者の概念である。十七世紀の政治哲学、当時の地下文書、さらにはモンテスキューら同時代の思想家の代表的政治的著作にあらわれる様々な立法者像と比較しつつ、ルソーの立法者の概念の特質を明らかにしようと試みた。

⑸第五の目的は、子供の嘘、教師の嘘という観点から、『エミール』を分析することであった。まずは、近年精緻化したアナール派歴史学の研究成果を批判的に検討することから始めることにした。次に、先行する教育論と当時の教育論を読み直して、それらと比較しつつ、ルソーの方法の独自性を確認した。そのうえで、次の二点を集中的に分析することにした。①『エミール』を、「嘘」と「虚偽」なき人間の創出の試みとして解釈することが可能である点を示すこと。②その試みを実現するうえで、ルソーが大きな理論的難問に直面したことを論証し、それをいかに解決しようとしたかについて、ひとつの仮説を示すこと。最終的には『エミール』についての新たな総合的解釈を提示することを目的とした。

⑹ルソーの女性論をめぐっては、近年最も激しい議論が展開しており、解釈が最も激しく対立している。女性の嘘という視点からルソーの女性論に新たな解釈を試みるのが第六の目的であった。分析の対象としたのは、『エミール』第五篇の長大な女性論と小説『新エロイーズ』であり、『ダランベールへの手紙』は付随的に論じるにとどめた。作業を進めるにあたって次の作業を行うこととした。①英米圏のフェミニズム批評、ジェンダー研究の影響下、集中的に行われたルソー批判の再検討。②前述のルソー批判への応答、すなわちこうした批判へのさらなる批判としてなされた研究の再検討。これらの作業を行ったうえで、女性の嘘という視点から二作を読み直すことにした。それにより、ルソーのいわゆる人間論を総合的に解釈するための、新たな視座を導入することを目的とした。

⑺⑴で触れたように、「嘘の思想家」としてルソーの名を思想史に刻むことになったのは、『告白』『孤独な散歩者の夢想』である。しかし、他の自伝的著作、とりわけ『ルソー、ジャン=ジャックを裁く　対話』においても「嘘」の主題は前景化している。この『対話』はいわゆる全体主義的な嘘のシステムの解明という観点から読み直すことが可能な作品である。そのような読み直しによって、『告白』から『対話』へ、『対話』から『孤独な散歩者の夢想』への移行を、嘘との闘争史という視点から再検討することが可能になろう。本研究の最後の目的は、「嘘」という視点を導入することによって、自伝的著作の総体に新たな解釈の可能性を示すことにあった。

以上のように、ルソー作品全体を再読・精読し、さらにはルソーに影響を与えた先行する思想家、同時代の作家たちの主要作品を読み直し、「嘘」という視点から、ルソー思想の新たなる総合的解釈を目指した。いわゆるマイナー作品や書簡も考慮に入れつつ、論じる対象はあくまで代表的著作とした。

３．研究の方法

ルソー作品の読み直しには、最新の研究成果を反映した主に 2000 年以降に刊行された批評校訂版を利用した。また生誕 300 年にあたる 2012 年、あるいはそれ以降に出版された膨大な研究書を丹念に読み込んだ。しかし、そうした調査を進めるうちに、今日「古典」とみなされている、二十世紀後半に刊行された大部の研究書にも、本研究を遂行するうえで有益な考察が多く含まれていることに気づかされた。そのため、これまで繰り返し参照してきた「古典的」研究を改めて精読した。

さらに、最新の研究動向に関する情報収集のため、定期的にフランスで研究調査を行った。使い慣れたエコール・ノルマル図書館、フランス国立図書館での調査研究は、資料収集の点で極めて効率的なものとなった。それに加え、研究成果の海外での公表を本研究の目的のひとつとしていたため、フランスでの調査研究は、その準備としても極めて重要な意味を持つものとなった。

また前述のように、本研究は、モノグラフィー、つまり一思想家の作家研究の形を取りながらも、ルソー主要作品を、同時代の思想家だけではなく、先行する、または後の時代の代表的思想家の主要作品との対話性の視点から、実際にそうした作品に触れつつ、読み解こうとする試みであった。この再読の作業にも、2000 年以降に刊行された批評校訂版を利用することができた。そしてここから様々な示唆を得た。

近年、フランス啓蒙思想研究においては、電子版や各種オンラインデータベースの活用が不可欠となっている。本研究においても、当然ながら、Eighteenth Century Collections Online (ECCO), Electronic Enlightenment などを利用した。しかし、これらの利用は、あくまで、言語表現の総体としての言説に「嘘」がどのように埋め込まれているかを把握する目的での利用に限定し、主要作品に関しては、これを精読し、各作品全体の理解を目指した。

４．研究成果

本研究最大の収穫は、当初立てた計画にほぼ沿う形で研究を進め、その成果を一冊の書物として刊行できた点にある。「研究の目的」に記したように、七つの観点から「ルソーの嘘の哲学」について総合的な考察を行ったが、それらの成果を有機的に結びつけ、『嘘の思想家ルソー』としてまとめることができた。それにより、本研究の全体像を示すことができたと考えている。

各論考の準備作業において、そして書物としての刊行にいたるまでの作業過程で得られた成果を順に説明したい。

⑴『告白』『孤独な散歩者の夢想』という自伝的著作で扱われる個人的経験としての「嘘」と道徳的義務の関係の分析については、「研究期間」前に公表していたが、書物としてまとめる過程で、さらにこれを二つの点で発展させることができた。①西洋思想史における「嘘」についての思想の変遷をより正確に辿ること。②ルソーの明示的、あるいは暗黙の対話者の「嘘」について思想をより正確に把握すること。②については、モンテーニュ、モンテスキューや、グロテティウス、プーフェンドルフといったいわゆる自然法学派の思想家だけでなく、エルヴェシウスの思想について理解を深めることができたことが大きな成果である。エルヴェシウス自身がルソーを特権的対話者と位置づけていたことはよく知られているが、「嘘」をめぐる二人の思想家の対話が、政治哲学や性といった領域にまで及んでいることを示した。

⑵次に、ルソーの政治思想における虚言の問題については、二つの研究成果を得ることができたと考えている。①まずは、ルソー思想の揺らぎを提示しえたことである。政治をめぐるルソーの思想は、決して「静的な」、ひとつの体系に還元できるものではない。ルソーは絶えず変化する自らの思想的課題に応じて、そして自らの置かれた知識人としての特異な状況に応じて、「移動」しつつ思考を営んでいった。そうしたルソーの特異性を、「嘘」に注目することで、明らかにすることができた。②次に、『人間不平等起源論』第二部で記述される、いわゆる「詐欺師の契約」の再検討を行うことができた点が大きな成果であろう。『人間不平等起源論』については日本国内でも膨大な研究蓄積があり、新訳も含む複数の翻訳があるが、そのほとんどが、「詐欺師の契約」に言及さえしていない。この重要な問題を、日本の読者に示しつつ、その解釈についてひとつの仮説を示すことができた。

⑶第三の課題は、『ボーモンへの手紙』、『山からの手紙』といった代表的論争書における虚言の問題を分析することであった。この点に関しては、次の二つの成果が得られたと考えている。①ルソーが展開する精緻な理論的考察を再構成しえたこと。②ルソー思想に対する批判的視点を導入しえたこと。ルソー研究はしばしば党派的礼賛へと向かう傾向があるが、ここでは、ルソーの思考、ルソーの論理に潜む危険性を示すことができた。この点に関する論考がハンナ・アーレントへの言及から始められていることは決して偶然ではない。さらにここでも、⑵に引き続き、ルソー思想の揺らぎを明らかにすることができた。ルソーの「嘘」についての思想は決して「静的な」ものではないことを明確に示すことができたと考えている。

⑷『社会契約論』を「嘘」という視点から再読するのが本研究の第四の目的であったが、この点では次の二つの成果が得られた。①難解な『社会契約論』という作品全体についてひとつの解釈を提示しえた。「嘘」という視点を導入することによって、しばしばルソー作品内での位置づけが困難となるこの作品について、ルソーの他の作品との関連性を明らかにすることができたと考えている。②次に西洋政治思想史におけるルソーの特異性を明らかにした。プラトン、マキャヴェッリ、そして同時代の思想家の著作にあらわれる立法者像を丹念に再構成しつつ、ルソーのそれの特異性を明らかにした。

⑸第五の目的は、教師と子供の関係を通して、『エミール』を分析することであった。アナール派歴史学研究や西洋教育思想史研究の成果を参照しつつ、モンテーニュ、（ジャン＝バティスト・ド・）ラ・サール、ロラン、ロックらの名高い教育論を読み直し、ルソーの教育論、人間論の革新性を明らかにしえた点が第一の成果である。しかし、ルソーの企図の革新性を確認しつつも、ここでも、ルソーが理論的難問に直面したことをはっきりと論証した。その理論的難問と、ルソーの提示した解決法を集中的に検討することによって、『エミール』という複雑な作品についての新たな総合的解釈を提示することができたと考えている。

⑹ルソーの女性論をめぐっては、英米圏のフェミニズム批評、ジェンダー研究の影響下、集中的に行われたルソー批判の検討し、特にフランスで顕著な、これらに対する再批判を読み込むことから始めた。この作業により、今日、ルソーの女性論を扱うことが、どのような意味を持っているかを明確にできた。さらにここでも、女性の「嘘」をめぐる同時代の思想、例えばモンテスキューやディドロ、マリヴォーといった作家や哲学者の思想を整理しつつ、ルソーの思想的立場の特異性を明らかにすることができた。最終的には、『エミール』第五篇の長大な女性論と小説『新エロイーズ』について新たな解釈を示すことができたと考えている。

⑺『ルソー、ジャン=ジャックを裁く　対話』における「嘘」の問題を検討し、『告白』から『対話』へ、『対話』から『孤独な散歩者の夢想』への移行を、嘘との闘争史という視点から再検討するという当初の目的については、いくつかの論考で付随的に論じることしかできなかった。ただし、フランスで発表した複数の研究ではこの問題に触れることができたため、また『嘘の思想家ルソー』でも簡潔に整理することができたため、一定の成果を得られたと考えている。

このように、当初立てた研究計画にほぼ沿

う形で着実に研究を遂行し、さらにはこれに発展的な修正を加え、『嘘の思想家ルソー』という書物にまとめることができた。この意義は極めて大きいと考える。本研究の成果は主に日本語で書かれたが、日本語以外の言語でも書かれることのできた内容だと自負している。日本の特異な知的文脈のみで通用するような防衛的、内向的なものではなく、常に国外の研究者との対話をもとにして、あるいはそれを想定して書かれた。つまり、開かれたルソー研究、啓蒙研究とりなったと考えている。

さらに本研究は副次的な研究成果ももたらした。すでに繰り返し強調したように、本研究は、ルソーという一思想家の作家研究の形を取りながらも、同時代の思想家や、先行する、または後の時代の代表的思想家の主要作品との対話性の視点から、実際にそうした作品に触れつつ、読み解こうとする試みであった。それゆえ、他の作家についても、独創的な解釈を示すことができたと考えている。

例えば、研究期間内にはラクロ『危険な関係』の新訳を出版できたが、これには長大な解説を付した。この解説は文字通り、ラクロのこの名高い作品を、「嘘」という観点から読み解こうという試みであった。一般の読者を対象とした訳書であったため、専門的な叙述法をとることはできなかったが、最新の研究を読み込みつつ、「嘘」の問題を『嘘の思想家ルソー』とは異なる視点から掘り下げることができたと考えている。

また、ルソーの音楽関連作品、演劇関連作品を理解するうえで、さらには女性論について考えるうえで極めて重要な作家マリヴォーについても、本研究を進める際、頻繁に読み直し作業を行った。マリヴォーについては、ルソーとは切り離して、個別の研究を発表することができた。

ラクロ、マリヴォー以外にも、ヴォルテールやモンテスキュー、ディドロといった思想家について読み直し作業を行った。ルソーの影響下、興味深い伝記的作品、自伝的作品を残したレチフ・ド・ラ・ブルトンヌについても論考を発表できた。

このように、あくまでルソー思想の統一的総合的解釈を第一の目的としつつも、その正確な理解のために、他の作家や思想家の作品をも慎重に検討し、研究成果を発表できたことは大きな収穫であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　8　件）

桑瀬章二郎、「レチフ－啓蒙の「マイナー文学」再考のために」、文芸事象の歴史研究会編、『GRIHL　文学の使い方をめぐる日仏の対話』、吉田書店（頁 349 ～ 356）、2017 年（計 7 頁、査読無）

桑瀬章二郎、「マリヴォーと「肖像」」、『立教大学フランス文学』45 号（頁 9 ～ 31）、2016 年（計 23 頁、査読有）

桑瀬章二郎、「〈嘘〉の思想家ルソー　―第 5 章　子供の嘘、教師の嘘― 」、『思想』1085 号（頁 39 ～ 63）、岩波書店、2014 年（計 25 頁、査読無）

桑瀬章二郎、「〈嘘〉の思想家ルソー　―第 4 章　立法者という奇蹟― 」、『思想』1083 号（頁 62 ～ 86）、岩波書店、2014 年（計 25 頁、査読無）

桑瀬章二郎、"Reconnaître Rousseau": les interprétations et les usages des *Confessions* pendant la Révolution, in *Biographie et politique: vie publique, vie privée, de l'Ancien Régime à la Restauration*, sous la direction d'Olivier Ferret et Anne-Marie Mercier- Faivre, Presses universitaires de Lyon（頁 105 ～ 118）, 2014 年 （計 14 頁、査読無）

桑瀬章二郎、「〈嘘〉の思想家ルソー　―第 3 章　嘘の告発者／虚言者ジャン＝ジャックの誕生― 」、『思想』1078 号（頁 106 ～131）、岩波書店、2014 年 （計 26 頁、査読無）

桑瀬章二郎、L'unité de l'oeuvre de Rousseau: une étrange grille de lecture, *Rousseau studies* 1 号, Champion,（頁 251 ～ 266）, 2013 年（計 16 頁、査読無）

桑瀬章二郎、「〈嘘〉の思想家ルソー ―第 2 章　政治における虚言― 」、『思想』1069 号（頁 65～ 86）、岩波書店、2103 年（計 22 頁、査読無）

〔学会発表〕（計　2　件）

桑瀬章二郎、「はじまりのアポリア―『社会契約論』と『エミール』、立教大学フランス文学専修主催学術シンポジウム、研究発表、2014 年 3 月 15 日、立教大学（東京都・豊島区）

桑瀬章二郎、「書簡を読むために」（桑瀬章二郎、小倉孝誠、岑村傑「作家の書簡をどう読むか」日本フランス語フランス文学会ワークショップでの研究発表、2013 年 6 月 2 日、国際基督教大学（東京都・三鷹市）

〔図書〕（計　2　件）

桑瀬章二郎、『嘘の思想家ルソー』、岩波書店、

2015 年（271 頁）

桑瀬章二郎、早川文敏（共訳）、ラクロ『危険な関係』、解説（単独）、白水社、2014 年（591 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
桑瀬　章二郎（ KUWASE, Shojiro ）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：10340465

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）